

△研究ノート▽

越前国東大寺領庄園の

經營と在地豪族の動向

鈴木 邦子

古代社会を解体に導き、中世社会を創出する原動力となった歴史的分層として、戸田芳美氏は「富豪層」を提起され、その歴史的概念を明らかにされたのであった。戸田氏に対する批判も含めて富豪層に関する研究の多くは、その視点を封建制の成立に置いており、すでに形成され、ある程度の展開をなしている富豪層經營と、その領主制への発展を主に問題にしておられ、富豪層が形成される基盤である古代社会を単に、「律令制」とのみ把える傾向があるように思われる。

しかしながら、七世紀後半から八世紀の社会が、所謂「律令制」という範疇で把えきれぬのかという疑問が多く、点から出されておき、「律令制」社会に、富豪層形成の物質的根拠を求める事には無理があるように思われる。それは当時の人民を一律に「公民」「班田農民」として把え、それを出発点に富豪層

の形成を論じるといふ方法に端的に見られ、共同体の崩壊と、それに伴う激しい階層分化が顕在化していた古代社会の中から富豪層の形成を論じた考察は未だに少いように思われる。いわゆる律令制の最盛期、展開期である八世紀にも「富豪」は多く存在するが、この未成熟な階層が、過渡期における歴史の転換者として成長してゆく過程を追ってみたい。そうする事によつて、古代社会の矛盾が生み出し、その矛盾を尚多く身にまといながら、古代社会を突き抜けるものとして展開した富豪層の、その苦闘を自分なりに把えてみたい。

1

戸田氏の考えられた富豪層經營とは、九世紀において大量の稲穀・馬牛・奴婢等の動産を所有し、営田と私出挙を軸として農民の宅の収奪と債務奴隷化とが有機的に結びついて発展する家父長的な大經營である。この經營は公民だけでなく「富豪浪人」にも見られ、労働力は富豪の家の外部に自らの生産と居住の基盤を保持しながら私出挙債務や雇傭関係を契機として隷属化したものである。

この戸田氏の富豪層論に対する批判をひととおり見ると次のようである。

原秀三郎氏は、富豪浪人は郡司以下農民に対し悪党的収奪を行うばかりで何ら新しい生産関係を創出しえないが、郡司等在

地の富豪層は一定の限界を持ちながらも新しい時代の推進者として現われ、両者は階級的に区別されると述べられた。又、坂口勉氏は、第一に、富豪層の私富は手工業生産物中心であり、第二に、「古代的商人」という体制外的存在であるか、体制内において調庸物の生産・調達を行政的・地域的に支配していた国・郡司であるかにより、私富の意味も異ると述べられ、更に門脇禎三氏も、富豪層とは農業共同体内部で卓越的に私的奴隸を所有し、農業・手工業に私的経営を展開させつつあった家父長制家族の首長層(郡司層)として把握すべきであるとされた。

以上の研究を踏まえて富豪層についての問題点を摘出するならば、第一の問題として、富豪層を、富豪浪人、在地の有勢者¹¹郡司層のいずれに力点をおいて把握するかであろう。戸田氏が富豪浪人を高く評価されるのは、律令制の解体を、国衙による徴税請負人の設定対象の変化、即ち「不論土浪人」として浮浪人が公民と同一視される過程から把握しようとした結果と思われる。原氏の言われるように、両者の区別は必要と思われる。この問題は又、経済的概念としての「富豪層」が実体的にはいかなる階層を含むのかという事¹²でもあり、郡司層と富豪層が同一階層として把えるかという点と、併せて基本的な問題である。

第二には、富豪層の私富の内容が、農業生産物と手工業生産物のどちらを中心としたのかという問題がある。これはその私

富が営田と出挙という農業経営によるのか、あるいは「交易の利」¹³即ち調庸收取機構を通しての私的収奪によるのかという富豪層経営の本質的性格を規定する問題であろう。

又、律令制下における土豪の私的な個別経営発展の基礎を、専ら地主的な墾田所有、奴隸な労働力の集積に求める見解も多い。しかし、これら不動産所有に発展の根拠を求める説は、所有を現実化させる主体の能動的な役割と構造の省察に欠ける所があると思われる。従って、八・九世紀の私富が動産所有として現われる意義を、その内容とともにここで考えてみる必要がある。

第三に、富豪層経営における労働力の性格とその労働形態の問題が、この経営の構造をいかに把握するかという事とともにあげられる。

戸田氏は、富豪層に体现される農奴制的な家父長制的生産様式の発展と、初期庄園の展開とが同一不過分の過程であると考えられ、王臣家の庄とは私営田と結合した農村富豪層の私宅・田家と同じものであり、富豪層の所有と経営が直接の土台となり、富豪と貴族の私的結合によってそれが貴族の家産的な土地所有制に転化されたものであると述べられたが、正鵠を得た発言であると思われる。しかしながら、従来の初期庄園に関する研究には、富豪層経営との関連をもつて考察されたものは少い。従ってやや繁雑になると思うが、初期庄園に関する研究につい

てここで触れておきたい。

初期庄園はその耕作労働力の性格をめぐる、奴隸制的な経営を主張される藤間生大氏と、班田農民による賃租経営であるとする竹内理三・舟越康寿氏らの対立がある。

岸俊男氏は、越前国東大寺領庄園が附近の班田農民による賃租経営である事を確認され、庄園領主と直接耕作者間の比較的自由な関係（桑原庄の場合）と、形式的には庄園領主と地方豪族間に結ばれ、現実的には何らかの強制を伴う地方豪族と耕作者間の（鯖田国富庄、道守庄の場合）、二種類の賃租がある事を明らかにされた。

岸氏の見解は、従来一括して「初期庄園」とされてきた個々の庄園の性格、賃租関係の多様性、在地豪族の庄経営への参加を明らかにされた点が重要であるが、尚不十分な点がいくつか見られると思う。第一に、依然として賃租関係の本質は不明であり、労働力の性格についても身分上の奴婢ではない事が解るのみで本質的な性格に関しては曖昧である。第二に、在地豪族と庄園領主の関係である。岸氏は初期庄園の経営に關与した豪族は寄進した田地に從來通りの權利を保持したと言われたが、在地豪族の反抗がある事からもその関係は一樣ではなかったかと思われる。第三に、在地豪族と農民との関係である。いかにして豪族が賃租耕作に農民を組織化したか、岸氏は全く自由な契約ではなく「何らかの規制」によると言われたがその内容に

ついては触れておられず、一応自立した経営を営んでいた農民の賃租への契機も又不明である。

これらの問題点に一応の解答を示されたのは東（吉田）晶氏であった。¹¹氏は賃租の行なわれる具体的条件を示され、農民は独立した経営を有しつつも土地所有者には隷屬し、豪族は庄園領主に対しては一使用人にすぎず、農民が賃租に向う契機は零落より免れる為郡司層に依存せざるを得なかったと述べられた。しかし、東氏は初期庄園における在地豪族の役割を軽視しすぎるようにも思われる。

米沢康氏は、¹²従来の初期庄園に関する研究視角が、庄園の動向にのみおかれた在地の情勢は考察される事が少いと批判されたが、庄園の盛衰からのみ在地豪族との関係を考えるのではなく、彼らが展開していた経済活動の面から捉えなおしてみる必要があると思われる。

富豪層についての第四の問題として、八世紀と九世紀の相違点を考えたい。八世紀においても力田と呼ばれるように富豪が数多く存在していたが、九世紀の富豪層との比較を通してその形成過程に触れてみたい。

2

坂井郡下にあった桑原庄は、天平勝宝七歳大伴宿禰麻呂から買得した九九町余の土地をもとにして成立したが、成立当時は

未墾地が多く、天平宝字元年、大規模な修理・開発の計画がたてられた。¹⁸⁾『越前国使等解』によれば、田が溝よりも高く灌漑の役割を果たせない為に従来の溝の修理を含めて三本の溝が掘られる事になっている。

この文書の中で注目すべきは「度樋」の記載であろう。原秀三郎氏は、この度樋¹⁹⁾は沖積平野の開発を可能にし、八世紀の開発技術の特質づけるものとされる。そして溝と樋という灌漑方式が東大寺によって採用され、同じく東大寺領因幡国高庭庄の野地占定に「見水道」が当たっている事は、当時の先進技術と技術者とを律令国家が集中的に掌握しており、この時期の生産力発展の主導権は、国家機構に連なる貴族官人等に握られていた事を示すとされた。しかし、律令国家や貴族層が開発を主導しそれによって支配を強固にしていた段階は七世紀後半から八世紀前半で終了していたと思われる。何故なら、樋は七世紀前半より存在する技術であり八世紀に至って貴族層は何ら新しい技術を生み出してはいない。又、国家自身の手による開発が行なわれず、私墾田を容認する方向にあり、零細ではあるが農民自身の開発が行なわれ、「犁」が発明されているなどの事を考えると、当時は溝、樋の灌漑方式が広汎に使われ出し、郡司、力田など富豪層に開発の主導者が移っていたと考えられる。

先の桑原庄の三本の溝の造営に当って百姓口分田が破壊されている。これを沖積平野の開発が水源から近い順に行なわれる

為に起ると原氏は説明されており、他の庄の場合にも見られる事から越前においては普通の現象であったようである。道守庄の溝の開設の場合には、百姓口分田に灌ぐ溝を損じている。²⁰⁾このように旧来の溝とが切り合う場合、度樋をいずれかにかける事によって両方の溝の機能を併存させるという技術が、公水と対立する私水²¹⁾と私の灌漑設備を可能として私墾田を保証していたと考えられる。

足羽郡の道守庄は足羽郡大領生江臣東人の進献した百十八町²²⁾の地を基礎として成立した。この際、東人は「私功力」によって開いた溝二千五百余丈を合せて東大寺に寄進している。この溝を開くための労働力の量について、弥永貞三氏、亀田隆之氏の推定によると八百人から千八百人という数字であり、「功力」と見える所から雇用労働力と思われるが、「未任郡領時」にこれ程多数の労働力を徴発しえた東人の力は余程大きかったと思われる。

道守庄が寺田とされる以前の様相は天平神護二年『越前国司解』²³⁾に見え、先に東人が進献した寺田、百姓口分田、私墾田が入りまじって存在していた事が知られる。その道守庄として占定された地には、東人をはじめとする豪族の他にもう一人大規模な墾田を所有する田辺来女がいる。来女は右京四条一坊戸主従七位上毛野公典麻呂の戸口であり、宝字八年仲麻呂の乱に連座してこの墾田は没官され東大寺領に編入された。

道守庄絵図によると東人の墾田の大部分は上田か中田であるのに対し、来女の墾田のその多くが下田である。この田品の差は、東人の田が二千五百余丈の大規模な用水水路による灌漑だが、来女の墾田はその利用に限界のある沼水を利用しただけのものという灌漑技術上の相異によるものと思われる。原氏はこの差を、東人が造東大寺史生として律令機構に所属していたため、当時国家が独占していた先進技術を導入しえなかったからと言われ、生産力発展の客観的諸条件が現実の政治的諸関係によって左右されると、八世紀の生産が貴族層によって主導されていた事の根拠とされた。

確かに、同じ坂井郡大領の品治部君広耳が東大寺に寄進した墾田百町が坂井郡全体に広く散在する零細なものである事と比べても、東人の墾田ははるかに一円的であり、計画的な高度の技術による開発と推測できる。原氏の見解は技術の階級的性格を明らかにされている点重要であるが、前にも述べたように、国家、貴族の先進技術の独占と生産力発展を主導する段階はすでに終了していたのであり、東人、広耳、来女の墾田の相異を技術の面からのみ説明するのは無理があるであろう。田辺来女は時の権力者仲麻呂と係りのある事から、先進的技術を導入しうる機会には東人と同じく恵まれていたと考えられる。

彼ら三人の墾田の差異は、越前における在地性に深く関わるであろう。先進技術を現実の生産の中に投入しうる労働力・私

富がまず必要だったのであり、それらは在地の生産関係の掌握の上に可能だったのである。東人が生産力の高い田地を有する根拠としては、生江臣一族が諸第郡司といわれる在地の豪族であった事が考えられる。単に技術の優劣が開発の進展を規定するものではない。

3

桑原庄の田地は、その多くの部分が未開であつたため、東大寺自身によって開発が行なわれた。天平勝宝七年の桑原庄券第一にはその労働力について

開田 廿三町 功稻二千三百束町別一百束

合造作并修理舎八箇

単功九百七十四人

充功九百七十四束 人別一束

食料三百八十九束六把 人別四把

の記載がある。

藤原生大氏はこの記載から、舎屋の修理营造などの技術労働者には食稻と功賃が支払われたが、非技術的な開田労働力は、「町別一百束」の費用が記されるだけの奴隸労働力であると言われた。

これに対して舟越康寿氏は、この労働力は食料を支給される必要のない附近の班田農民であり、何人かが一町別百束の割合

で個々に請負つたものであらうと言われた。又、竹内理三氏も「町別一百束」の記載はその使用労働力ではなく仕事の性質によるもので、田地の場合には町別を以て表わすのがこの時代の例であり、開田に要した労働力は全て功稲を支払う雇用労働力であると述べられた。

今日、開墾には「町別一百束」の功稲を給された雇用労働力が用いられ、それは国家権力を背景とした何らかの強制が加わりつつも一応「和雇」の形態をとる事、雇用の対象としては若干の浮浪人・奴婢が含まれるが、庄附近の農民が主体であつた事が諸氏によって承認されている。しかし「和雇」とはいえ古代に對等な雇用関係がある筈もなく、労働力の組織化について造東大寺司や地方豪族の何らかの強制があると言ってもその具体的内容は不明であり、労働力の性格についての考察は未だ不十分な点があると思われる。

ここで再び「町別一百束」の記載に注目したい。竹内氏は田地の場合は「町別××束」と町別を以て表す方法が当時の例とされたが、その例にあげられた官符は公営田に関する文書である事を見送してはならない。公営田とは村里幹了なるものを正長にあて、彼らの監督の下に徭丁五人に一町を割りあてて耕営しようとする方式であつた。

越前庄園に関する他の記載でも「溝一千二百卅丈……単功一千二百人」と非技術的土木工事の労働力の量は「単功」で表わ

され、一般労働力であつたと思われる屋舎の修理も「単功××人」と記されている。更に天平年間の正税帳の記載では

改造神社料用顯稲 肆伯耆拾肆束漆束伍分

役単功肆伯五拾貳人

備稲貳伯貳拾陸束 人別日五把

食稻壹伯捌拾束捌把 人別日四把

と労働量は「単功」を以て表わし、功稲食稲は人数別に計算している。従つて雇用労働力を記す際にはやはり「単功××人、食稻××束、功稲××束」と表わされるのがこの時代の通例であつたと考えられる。

舟越氏は、開墾を百姓に請け負わせ、百姓が開き得た段別に応じて町別百束の割合で功稲を支払つたものであらうと言われたが、もし百姓の任意に開田が行なわれたならば、その田積は「廿三町」という正数にはなりえない。零細な墾田の集積は必ず「×段×歩」の端数を生じさせたと思われ、この「廿三町」の数字は予め定められた開田面積であると言わねばならない。

私はこの「町別一百束」は、寺院側が直接雇用した労働力に對する功賃でも、開田を請負わせた百姓等に支払われた功賃のどちらでもなかったと考える。寺院側と雇用された百姓の間には、労働力を集め、寺家側の要請する廿三町という開田面積にその労働力を割り充て、しかも町別百束の範圍で功食の支給を完済する役割を負う莊長の如きものが存在したのではないだろ

うか。

この役割を担って開発を行えたのは誰であらうか。それは労働力の編成を自ら行いうる者でなくてはならない。国家の手によって治水灌漑設備の营造・修理が行なわれる際にも、雑徭・雇役という国家的労働力の徴発ですら郡司・里長など地方豪族の力に依った事は亀田隆之氏³⁰の指摘された所である。東大寺領庄園においても、開田及びそれに必要な灌漑設備の营造・修理に要する労働力の編成には、在地豪族の力に依らざるを得なかった事は同様と思われる。造東大寺史生として寺家の野地の占定に生江臣東人が当り、越前国史生安都宿禰雄足が後の造東大寺司主典となつているなど、東大寺に關係している在地豪族は多いが、開田は彼らによつて請負われたのであらう。

東大寺によつて開発されている桑原庄においても豪族が関与し、彼らの寄進した田地を基礎とする道守庄、鯖田国富庄では近接田地の買得に生江氏一族が当り、その直稻を彼らが売人に支払い、灌漑設備、田舎までも寄進している事などは、労働力の編成ばかりでなく庄経営のすみずみに彼らが関与していた事を推測させる。

豪族が自分の開発をする場合と、東大寺の開発をする場合とは、所有する奴隷労働力の投入の仕方に多少の差異があるだけで、雇用労働力を基本とする事に変わりはない。その労働力の編成にかなりの強制があつた事は、宝龜三年の官符にある、

「天下諸人競為墾田 勢力之家驅使百姓 貧窮民無暇自存」の記事が物語っている。また、強制される以外に開かれた耕地の賃租を目的として農民自身が開発に参加した事も考えられる。しかし強制の有無のみで労働力の性格と雇用關係の内容を決定する事はできない。日別一束四把という鎌一柄（直二束）を買うのにすら不足する低賃金での雇用は、奴隷でなかったにせよ苛酷な条件下で農民が開田作業に従事した事を示している。そのような低賃金に甘んじなければならなかった不安定な農民経営こそが問題にされなければならない。

4

桑原庄が賃租によつて経営されていた事は、「去歲売田九町 佃稻七百廿束 町別八十束」「去歲売田卅二町 直二千一百六十束 廿町々別六十束」と庄券に記されていた事から知られる。

この賃租が文書の上では庄園領主と直接耕作者との賃租の如く表現されてはいても、その実態は土地の旧所有者やその土地に特殊な關係を持つ在地豪族（生江臣東人）と庄園領主間の賃租に過ぎず、直接耕作者はあくまでも奴隷的労働力であると藤間氏は主張された³¹。

これに対し岸俊男氏は、賃租経営を主張される竹内・舟越両氏の見解を継承されて、(1)東人と造東大寺司は特殊な關係がある、(2)庄の既墾田は溝低く田高きゆえに荒れ、「不買百姓」と

百姓が耕作拒否している、(3)田使乙麻呂自らが、賃租した逃亡百姓の直稻についての責任を負っている、の三つの根拠を示されて、東大寺と百姓との直接賃租を考えられ、この賃租が造東大寺司という律令的官司による経営であり、国司に売田直稻の収納が委ねられている、又、寺田は輪租田であるにも拘らず、桑原庄では租稻が直稻と同様に収入とされている等の事から、桑原庄は公田の賃租に近い経営であると述べられた。

「町別八十束」「町別六十束」は公田地子の中田、下田の場合に各々該当し、法隆寺や弘福寺の庄園の賃租料が田品、佃借人などの条件によって幅広い値を採っている事と比して、条件の違いを全く考慮しない数字も公田賃租的と言えなくもない。しかし、この条件を無視した賃租料は、東大寺と農民の直接賃租ではなく逆に何者かの介在を推測させる。岸氏が直接賃租の理由とされた(1)は東人の庄経営への関与を窺わせる、(2)は「不買百姓」の報告と溝を掘る要請を東人、雄足らが行っている事は、東大寺と農民の直接賃租の根拠とはならない。(3)の田使が逃亡百姓の地子を自ら負担しているのは唯一直接賃租の根拠となり得るが、百姓の賃租耕作よりの逃亡は賃租が強制された関係である事を示し、岸氏の言われる公田賃租的な、一年限りの「比較的自由な」性格とは相反するように思われる。要するに、桑原庄が庄園領主と耕作者との直接賃租経営である根拠は少いと考ええる。

鯖田国富庄は、天平宝字元年、坂井郡大領品治部君広耳が東大寺に寄進した鵜田百町を基礎として成立した。この庄の経営は天平宝字二年『越前国坂井郡司解』によって知られる。この史料は、広耳の鵜田百町の耕作者が広耳が寄進する以前に苗子を下していたので、宝字元年(寄進の年)の地子を東大寺に進上しない事を願って認められたものである。

この交渉が、寄進後旧所有者である広耳と東大寺との間に行なわれている事から、岸氏は賃租の契約対象が広耳であると言われ、天平十五年の鵜田永世私有令により鵜田所有面積が制限されたため、私田の収公から免れようと形式的に東大寺に寄進し、賃租を受ける形をとって、旧所有地に対する権利を保持したと考えられた。

同じ事は道守庄についても言われている。道守庄は前述の如く生江臣東人の寄進によって成立した。岸氏は、水守宇治智麻呂の任命、産業所の事、稻の収納と中央への報告、近接田地の買得などが全て東人や生江氏一族によって行なわれている事から生江氏が寄進後もその田地に対する権利を保持し私営田領主となる傾向を持つとされている。

これに対して東晶氏は、広耳の死後とはいえ寄進後間もなくその鵜田は零落し、東大寺が全面的に管理していたとされ、広耳が地子不払いの交渉をしているのは、彼がその年の地子を農民から既に取得しており、郡司として管内の土地を管理してい

たためと述べられ、生江臣東人とその一族の道守庄経営への関与もあくまでも東大寺の一使用人としてであるとされた。

初期庄園の経営に在地豪族の協力を不可欠とした事は、竹内理三氏をはじめ多くの研究者の指摘する所であるが、岸氏、東氏の見解の相違にも見られるように、その関与の仕方はいわかに決定できない問題のようである。この問題の指針といふべき見解として、竹内氏の「莊園にあつては土地の支配と農民の支配とは別のものではあつた」とする、所謂「領知権の二元性」論^⑤があり、この段階では、庄園領主は庄田の領有に関しては自己の權利を法的に確立しつつも、庄園経営に必要な労働力を人間的に確立するには至っていないかつたとする。この事が、庄園に在地豪族の関与を不可欠としたのである。先に開発の際、在地豪族により労働力の編成がなされ、請負的に開墾作業を行ったと述べたが、道守庄、鯖田国富庄の経営についても在地豪族の関与は同様であつたと思われる。東氏のように彼らが東大寺の一使用人の地位にいたとは考え難い。しかしまた、彼らが寄進後もその田地に旧来の權利を保持したとも言い得ない。

墾田永世私財法は、中央貴族や寺院には無制限に近い墾田所有を許し、地方豪族や有力農民の土地所有は厳しく抑圧する政策であつた。^⑥ 広耳、東人の墾田寄進は、制限面積をこえた墾田の収公を免れる為と思われるが、たとえ政府の収公からは免れても、東大寺によつて田地に対する彼らの權利は否定されたで

あろう。律令国家と本質的な性格を同じくする東大寺の土地所有の拡大は初期庄園の展開は、在地豪族の土地経営と真向から対立するものであつた、従つて東大寺が寄進を受けた土地に、旧所有者の權利を認めたとは考えられない。

つまり、庄園領主は労働力を確保しえなかつた為に、広耳や東人は寄進によつて土地所有権を失つた後も、労働力である農民に対する支配は従来のものであつたのであろう。道守庄における生江氏の活躍、鯖田国富庄での広耳の地子不進の交渉は、彼らが庄園に労働力の組織化の面で関わつていた事の上にも理解しうる。同様の事は、公団賃租的とされた桑原庄についても言える。「町別八十束」の地子は、開発によつて開かれ、それ以前の耕作者との結合を全く持たなかつた田地に対する労働力を豪族が請負的に組織化した事を示す数ではないだろうか。

5

天曆四年の『東大寺封戸莊園并寺用帳』^⑦によると、鯖田国富庄、道守庄は庄園として一層強化され存続しているが、桑原庄など多くの越前庄園は平安期に入ると間もなく荒廃し去つたやうである。

この事実について岸俊男氏は、桑原庄は公田賃租の経営であつたが、律令体制の崩壊に伴つて荒廃したが、鯖田国富、道守の両庄は在地豪族の旧所領における、その媒介による経営であり

強制的な耕作が続けられていた為に永く庄園として保持されたと言われている。

岸氏の見解は現実ほぼ承認されているようであるが、庄経営の分類には前述の如く疑問がある。即ち、桑原庄においても生江臣東人より稻四千七百束の寄進があったように在地豪族の介在は認められ、道守庄、鯖田国富庄経営に豪族は関与していても、宝字五年の事件に見られるように、彼らと東大寺との関係は緊張しており、在地豪族の介在がそのまま庄経営の発展に結びつくとは考えられない。

従来の見解が開墾時のあり方からのみ経営様式を考えているのは不適當であると批判された村井康彦氏は、「堪百姓」と称せられる田堵層が広汎に出現する賃租請作経営体制が未だ備わっていなかった事を衰退の理由とされ、又、米沢康氏は、私富の蓄積によって在地に実力を養った新郡司層の土地経営に寺家側が耕作労働力を奪われたためと言われ、直木孝次郎氏は、庄園領主が庄民の全課役を徴収しようとする事が、庄園と国郡司とを対立させ、「遠隔地の庄園は平安初期において、国郡司・豪族の侵略の前に没落してゆく」と岸氏とは正反対の意見を提出されている。

天曆五年十月の『越前国足羽郡庁牒』には道守・鎧雨莊荒廢の理由を「寄作人」がいない事とし、貞觀八年の史料には在地の情勢を「彫弊之民 挙門逃亡」と、庄園の賃租労働力である

班田農民が集团的に逃亡している事を記している。農民の逃亡は、主に苛酷な収奪と経営の不安定によると思われ、村井氏の指摘された如く彼らが墾田を賃租するだけの安定した経営を営みえなかった事を推定させる。

当時の在地豪族は、東人、広耳のように多くの私富を蓄え、墾田の開発、経営を行っていた。国家権力の抑圧や東大寺の進出によって私富や墾田を手離す事はあったが、在地に養った彼らの実力は、中央貴族の土地経営をある時は担い、ある時に対立しつつ、彼ら自身の土地経営を強固に展開しえ得たのである。その土地経営の発展は、それまで庄園地を耕作していた農民を在地豪族の側へ吸引するという結果となる。

従って、東大寺領庄園の衰退は在地豪族の私的な土地経営によってもたらされたと言えるであろう。米沢氏の言われる如く越前庄園の荒廢は決して越前在地の荒廢ではなく、そこには豪族の在地に根ざした新たな土地経営の展開があったのである。

6

品治部君広耳の墾田経営については、先の天平宝字二年正月十二日『越前国坂井郡司解』により幾つかの事が知られる。第一には、東大寺への地子の不進は春に広耳が耕作者より賃租料を受取っていた為と思われ、第二には、広耳の墾田が「営田貴賤」と言われる雑多な階層の農民によって賃租されている事で

ある。岸氏は、条理坪付によって寄進された墾田の復原を試みられた結果、墾田が極めて広範囲の散在形態をなしている為広耳の直屬労働力による経営を考え難いと言われたが、「賤」と言われる農民も奴婢ではなく独立した経営を営む零細農民であったと思われる。

広耳の墾田が賃租されていた事実は、彼が庄の耕作労働力を組織化する程の力を持ちながらも、それが土地と未結合の把握であった事を示している。耕作労働力の確保は豪族の経営も中央貴族の経営においても同様に困難であったが、そのような中で豪族が賃租あるいは雇用労働力を組織化しえた根拠は、私富の優越性、郡司として律令国家に連なっている事、「譜第郡司」としての旧来の支配、私出挙による債務関係、勸農行為などであった。豪族の農民に対する支配は、『丸部足人愁状』などに端的に示される如く相当強かったと思われる。

しかし、このような支配を受けていた農民は身分的にはあくまで国家公民であり、土地所有者に対しては相対的に自由な立場に置かれていた。具体的にいえば、農民は自分の口分田経営を維持しつつ、「諸方兼作之民」として複数の庄園や公田の耕作を同時に行っていたのである。この耕地と労働力とが未だ結びついていない事に加えて、奈良時代後半から平安初期にかけての現象として、墾田の増大とは逆の労働力の不足があげられる。

この現象は、班田農民の公民身分の廃棄に有利な条件となり私的経営においても、奴隸的労働力として把握しようとする庄園領主、豪族らに対し、農民が自らの経営を維持しつつ賃租や雇用の労働力となりえた条件でもあった。桑原庄に見られる、劣悪な田の賃租を百姓が拒否する為、寺側が溝を開掘して下田を良田にせざるを得なかった事態もこの上で理解できよう。

そして又、労働力の不足現象は、賃租経営ばかりでなく、庄園や豪族の佃経営の労働力に対しても有利な条件となったと思われる。その事を物語るものとして延暦九年四月十六日の官符があり、(1)雇用労働力を使役する個別経営が貧富に拘らず一般的に成立していた、(2)この個別経営は農繁期において「田夫」と称せられる雇用労働力の多量の投入によって支えられている。(3)その雇用労働力の獲得は容易でなく、魚酒を支給する事によって得られた、が知られる。雇用労働力が有利な条件で迎えられているのは、労働力獲得の容易でない事を前提としている。

初期庄園には賃租経営と佃経営の二形態が併存し、これは在地豪族の私的経営にあっても同様であった。九世紀における東大寺領愛智庄では全体十二町の庄田のうち二町が佃経営されている。この耕作者にとって不利な佃経営の労働力は私出挙による「役身折酬」という労働力であった。原秀三郎氏は、この佃経営は不安定な小経営の一般的存在を前提として成立する経営

方式であり、佃経営が未熟ながらも農奴制を内包すると指摘されているが、注目すべき見解であろう。佃経営の占める位置は一般的には中央貴族の経営よりは在地豪族の経営の中でこそ大きかったと考える。

このように中央貴族、在地豪族の経営はともに庄家と墾田の結合をその主要な形態とし、労働力支配を含まぬものであったが、在地豪族はそこから家父長制的な労働力支配の契機を獲得し、中央権門勢家の大土地所有制を支えていったのである。戸田芳美氏は、初期庄園は、富豪層の生産様式にそのまま依拠し、それを土台に形成された貴族層の大土地所有制に外ならないと述べられたが、まさに初期庄園とは法的に認められた土地所有制ではあっても独自の生産様式を創り出すものではなく、農村の生産の結果を収奪するだけの体制であった。その体制を支えながらも、在地においてはそれと対立する新しい生産関係が着実につくられつつあったのである。

7

戸婚律にある一年以上にわたり賃租関係を結べば佃借人を罪するとの規定は佃借人の用益権の強さを示すとして、賃租は一種の自由な相互契約であったと竹内理三氏は言われ、岸俊男氏も同様に考えておられる。

しかし古代において支配関係のない「対等な契約」「自由な

立場」などありえたであろうか。

東畠氏は賃租が行なわれる条件を具体的に三点示され、賃租とは土地所有者がその土地を耕作する労働力を所有しえない段階に、強制的に耕作に従事させられるものであり、農民は政治的経済的に地方豪族や家父長に対し隷属関係を持たざるを得なかったとされた。東氏の見解は、隷属関係を即奴隸的な関係と理解される点一面的と思われるが、賃租が土地と労働力の未結合の段階の土地経営法である事を明確にされた点は貴重であると思われる。

賃租は、庄園領主、在地豪族の強制によって成立したと思われるが、「営田貴賤」といわれるように、耕作者も幅広い階層が含まれ、その関係は一樣ではなかった。

天平七年讃岐国山田郡弘福寺田図^⑧には一坪ごとにその田品と直米が記入されており、その数値を表にしてみると、同じ上田でも地子は一町当り九四束から百七十束という著しく幅のある値となっている。又、天平勝宝九年正月廿一日付の法隆寺文書は、賃租に出された条里、耕作者の姓名、賃租田面積、直米が記され、耕作者を明らかにした唯一の史料であるが、その地子は一段当り二斗四升から一斗五升とやはり幅のある値を示しており、地子を絶で納めている例もあつて賃租関係の多様性を示しているといえよう。

このような多様性は何によるのであろうか。大化前代よりの

慣行的土地経営方法であるため、公田賃租の価すら「郷土沽価」によるとされいている制度の故であろうか。これは、賃租が土地所有者の強制でありながらも、農民がその支配をはね返して闘った結果であろう。不安定ながらも零細な農民が口分田と賃租田の耕作を営む独立経営を維持しつつ、再生産の不安定性の克服と墾田の所有へむかっていたのである。土地所有者が隸属關係を強制してくる中で、劣悪田の耕作を強いられ、時には田品以上の不当な地子を取奪されながらも、農民は賃租田耕作に自らの上昇の道を求めたのである。従って、八、九世紀の賃租は大化前代の経営、あるいは請作とは段階を区切って論ずべきように考える。

富裕農民や地方豪族が賃租にむかう契機は、墾田永世私有法による墾田所有の制限にあった。彼らは自己の墾田を賃租に出しながら、一方では賃租を受ける側ともなったのである。伊賀国柘殖郷の戸主敢臣安麻呂は、私墾田上田七段を天平勝宝元年十一月に元興寺三論衆に売進したが、売進後、天平勝宝三年からその地を賃租請作していた。林陸朗氏は、このような形態が後の預作権の留保という形態に発展すると述べられたが、それは寄進地と寄進者の結合を断とうとする中央の大土地所有者と私有権の獲得へむかう農民との闘争の中で把握するべきであろう。

墾田の所有が法的にも現実的にも制限されていた当時、賃租

は階層分化の主要な一契機となったのであり、又、現実には耕作する事を根拠として農民は土地所有を獲得してゆく。貞観年間の『近江国愛智庄検田帳』^④には、農民が上田を中田と偽って低い地子しか納めず、或は自己の墾田を拡大しながら寺田を侵略するという記事があるが、これらの闘いは八世紀の賃租耕作においても常に行なわれたであろう。このような闘いの中で、九世紀の富豪層は律令制の枠を破る程に成長してゆくのである。

○ ○ ○ ○ ○

以上において考察してきた事を要約するとおよそ次の通りである。

(1) 八世紀後半より、度樋・溝などの灌漑技術による大規模な墾田開発が盛んに行なわれ、「初期庄園」と呼ばれる中央権貴の大土地所有制が成立した。これらの開発に必要な労働力は、附近の班田農民の和雇によるものであり、その編成は在地豪族の力によらねばならなかった。

また、当時、地方豪族、有力家父長らによる墾田開発も相当に行なわれており、開発の主体が中央貴族・国家から彼らに移りつつあった段階であったといえる。

(2) 初期庄園の経営は、その庄が開発によって成立したのか、在地豪族の寄進によるものかによって若干の違いはあるが、基本的に賃租の形態をとり、労働力の確保は在地豪族の力を要したものである。

墾田永世私財法など耕地所有制限策に屈服し、あるいは中央権貴と結びつく為に、しばしば豪族は自己の墾田を庄園として寄進した。それによって彼らの旧所有地に対する権利は消滅したが、耕作労働力の確保は彼らによらねばならなかった為に、中央権貴と在地豪族は対立しつつも相互依存するという関係をつくり出していった。この事は、中央貴族層の大土地所有制が、富豪層の土地経営を土台として形成されたものである事を意味する。

地方豪族はまた独自に自己の土地経営を展開し、そのために初期庄園の荒廃がもたらされた。

(3) 賃租は土地と労働力が結合していない段階での耕作方法であり、それは決して自由な契約として存在しえたわけではない。奴隸的労働力として農民を把握しようとする土地所有者と自立した経営を保持・拡大しようとする耕作者との間の激しい拮抗の中で結ばれた関係である。当時の労働力の不足という条件が、この闘いを農民にとって有利に展開させた。

本稿は「古代における農業経営の一考察——八世紀の富豪層の形成」と題した論文を、紙数の都合により前半だけを掲げたものである。その為、はじめに示した問題点の第三点にしか触れる事ができず、第一、二、四の問題点を考察した後半については割愛した。

註

※『寧楽遺文』は寧、『平安遺文』は平、『大日本古文書』は古、であらわし、それぞれ頁数のみ示した。

(1) 「平安初期の国衙と富豪層」(中世成立期の所有と経営について)、『日本領主制成立史の研究』

(2) 「八・九世紀における農民の動向」(『日本史研究』六五)

(3) 坂口勉『富豪層』について、『歴史学研究』二七〇

(4) 門脇禎二「律令体制の変貌」(『岩波講座日本歴史』三)

(5) 戸田氏は在地の有勢力Ⅱ家父長制的農業経営体を考えておられるのに対し、坂口・門脇氏は「交易の利」による私富蓄積を行う国司・郡司を考えておられる。

(6) この問題に、「力田之輩」Ⅱ「田堵」層をいかに把えるのかも含まれるがここでは省略する。

(7) 塩沢君夫「八世紀における土豪と農民」(『古代専制國家の構造』)

(8) 「中世封建制の成立過程」(前掲書所収)

(9) 藤間生大『日本庄園史』、舟越康寿「初期庄園の労働力について」(『横浜大学論叢』一ノ二・三・四合併号)、竹内理三「庄園不輪性の根源」(『律令制と貴族政権』)

(10) 岸俊男「越前国東大寺領庄園の経営」(『日本古代政治史研究』)

(11) 「東大寺領越前庄園について」(『歴史学研究』一六〇)

(12) 「越中国東大寺領庄園をめぐる二・三の問題」(『地方史研究』八)

(13) 寧 六九〇頁

- (14) 寧 六九八頁
- (15) 「八世紀における開発について」(『日本史研究』六一)
- (16) 平、七四号
- (17) 宮原武夫「農民闘争と豪族」I(講座日本史I)
- (18) 寧、七二七、八頁
- (19) 寧、七一九頁
- (20) 弥永貞三『奈良時代の貴族と農民』、亀田隆之「古代水利問題の一考察」(『律令国家の基礎構造』)
- (21) 寧、六六二～六八九頁
- (22) 寧、六六三頁
- (23) 寧、六九〇頁
- (24) 『日本庄園史』
- (25) 前掲論文
- (26) 前掲論文
- (27) 弘仁十四年二月廿二日太政官奏(『類聚三代格』)
- (28) 寧、六九八頁
- (29) 天平十五年「周防国正税帳」(寧、二五八頁)
- (30) 前掲論文
- (31) これらの点については岸俊男氏の研究に詳しい。
- (32) 古、五ノ六四六～六五六
- (33) 宝龜三年十月十四日官符(『類聚三代格』)
- (34) 寧、六九〇、六九三頁
- (35) 前掲書
- (36) 前掲論文
- (37) 寧、七〇三～八、七二二頁
- (38) 寧、七〇八頁
- (39) 寧、七一九頁
- (40) 寧、七〇一頁
- (41) 寧、七〇〇頁
- (42) 前掲論文
- (43) 『日本上代寺院經濟史の研究』
- (44) 「莊園制と封建制」(『律令制と貴族政權』)
- (45) 吉田孝「壘田永世私財法の變質」(宝月圭吉先生還暦記念会編『日本社会經濟史研究』古代・中世編)
- (46) 平、二五七号
- (47) 天平神護二年十月廿一日「越前国司解」
- (48) 「莊園と寄作人」(『古代国家解体過程の研究』)
- (49) 前掲論文
- (50) 「律令制の動揺」(『日本歴史講座』二)
- (51) 平、二五八号
- (52) 貞觀八年十月八日太政官符(『類聚三代格』)
- (53) 寧、七〇一頁
- (54) 原秀三郎「八・九世紀における農村の動向」(『日本史研究』六五)
- (55) 『類聚三代格』
- (56) 平、一七二号
- (57) 古、七ノ四四

天平七年讃岐国山田郡弘福寺田図の賃租率（第1表）

坪 番 号	名 称	面 積	直 米 (石, 斗)	田品	1町当りの 直米(石)	1町当りの 直米(束)
1	樋蒔田	1町	5石5斗	上	5.5(石)	110(束)
2	造 田	450束代	5石	上	5.6	112
3	屎 田	400束代	4石6斗	上	5.7	114
4	角道田	1町	5石1斗	上	5.1	102
5	弟 田	1町	4石5斗	中	4.5	90
6	樋蒔田	1町	5石	上	5.0	100
7	畠 田	450束代	4石7斗	上	5.2	104
8	佐布田	250束代	3石5斗	上	7.0	140
9	畠 田	1町	4石7斗	上	4.7	94
12	佐布田	150束代	1石8斗	上	6.0	120
14	佐布田	70束代	1石3斗	上	9.2	184
15	畠墾田	50束代	1石5斗	/	15.0	300
15	畠 田	110束代	1石1斗	上	9.0	100
17	佐布田	87束代	1石5斗	上	8.62	170
17	畠成田	50束代	5斗	/	5.0	100
18	畠 田	490束代	6石	上	6.3	126
19	柿本田	1町	5石5斗	上	5.5	110
20	柿本田	350束代	3石5斗	上	5.0	100
20	畠墾田	140・・	1石4斗	/	5.0	100

(58) 天平勝宝九歳正月廿一日付断簡文書『法隆寺大鏡』二五、こ

の史料については岸俊男氏が「奈良時代の賃租に関する史料」
『ヒストリア』一二(一)の中で詳しく考察しておられる。

(59) 寧、六五〇頁

(60) 「賃租をめぐる農民と土地」(『上代政治社会の研究』)

(61) 平、一二八号